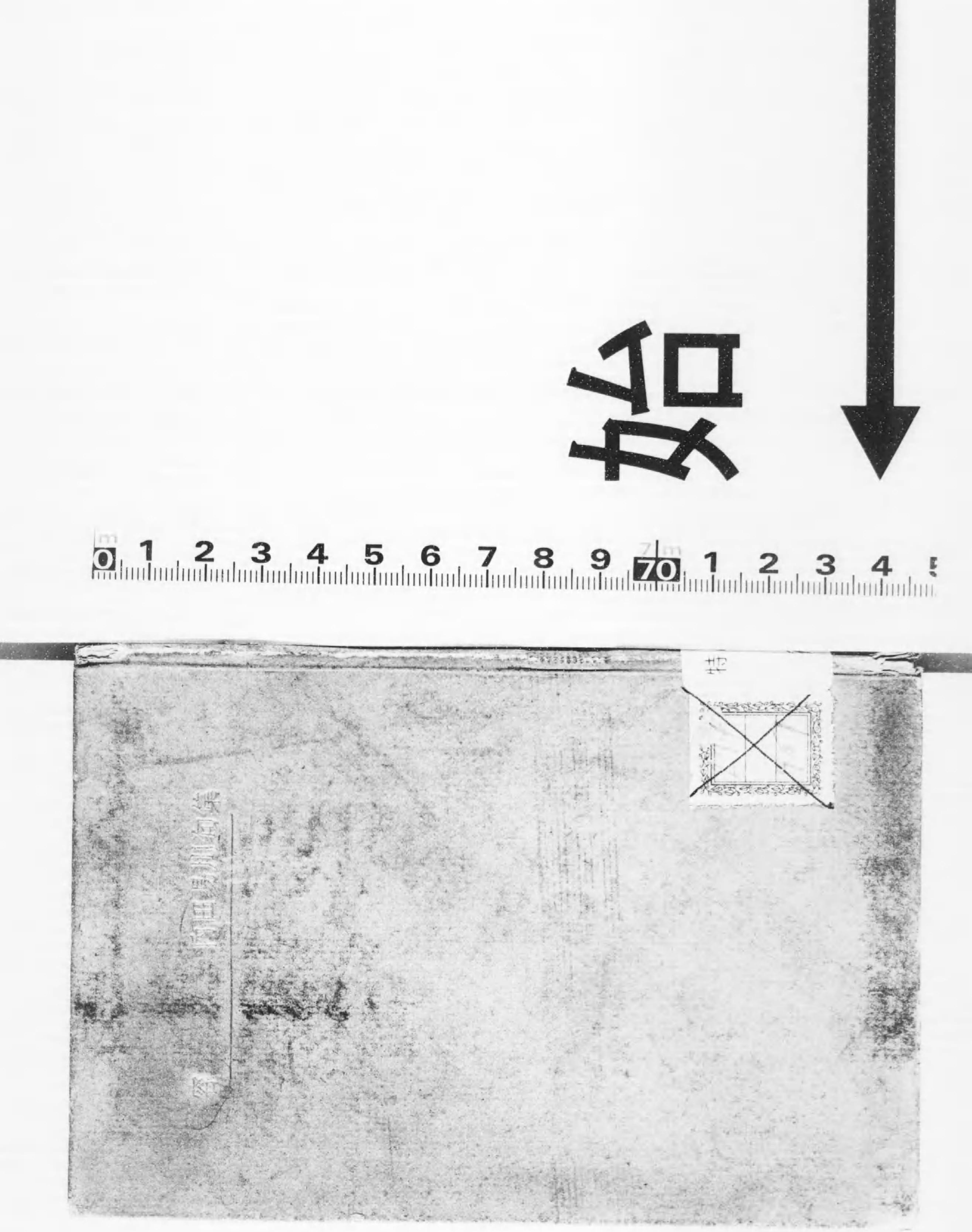
70

特109
975

朝鮮總督府

內田易川句集

大正
3. 8. 21
內交

夏の日の光に滿てる野に
立ちて吾れは歩めり
泥いぢりせし童の如く
滿らなる夏草に嬉々として

―自序―

内容

東京篇

1 白駒同人と共に……
2 朱鞘社の會合……
3 根岸の集りにて……
4 三ノ輪の集りにて……

5 朝鮮へゆきし日……
6 門司をすぐる日……
7 大阪に立寄りて……
8 日本俳句の私の片影……

大阪篇

1 最初の寓居……
2 倶樂部の席上……
3 寺の夜々……
4 第三の寓居……
5 紙衣句會の折り〳〵……
6 公園の小亭にて……
7 廊の或る家にて……

8 西の宮の或る日……
9 伊賀上野にゆきて……
10 人々を祝して……
11 人々を悼みて……
12 五の日の集り……
13 第四の寓居……
14 その日毎より……

東京篇

明治四十五年六月まで

養鮭所員双び行く朝花菜かな

子心に白の大きさ晝蛙

廊外は帆柱月と田蛙と

大久保へ畵架提くる袷にて暑し

問屋暇な大川端の袷人

案内されし製圖室桐の枝蛙

乳屋娘の日傘校舍の紫陽花に

花桐の大雨や習字時間なる

縣廳前にて花桐のある旅人宿

工、白駒同人と共に

春日影雀戦さの地面持つ

在郷兵三人花菜桶屋より

菜の花の祭り里大橋のあり

丘の燕に立てる觀測所の人か

雨に寒う織りし桐畠雉子翔りぬ

紙所の犬追ひし雉か湖越ゆる

蚊帳外に置く新聞や翡翠に覺む

紫陽花にポチ吠ゆる砂利の人通り

螢追ふて磴上りしが翌(あす)休み

夏虫や猫のぼる棕櫚よりの風

一番船見送りつ蕗に旭滿てり

蕗曉けの一つ家屋根に梯子せる

蕗月夜を手紙讀む石工となり

瓜店の釣瓶飲み橋の長かりし

蕗の中にこの國の風俗を見つ

御伽噺に出づ蕗國の白い鳥

日向葵に泳ぎ子の黒ろさ田舍なり

對岸の家厩あり馬と日向葵と

炊夫等は日向葵に脱ぎて泳ぎ出し

車返す畑梅干簀幅とりて

天水桶に飛ぶ蝙蝠と長松の暇(いとま)

鷹捕へし村人の過ぎし清水掬む

花桐の村埃り橋材運ぶ兵

行水名殘路次の倶樂部の空きしより

晩鐘裡霧塞く路次に戻る人

柳散る傘塲外銚子線路なる

返り咲く頃の普請神奈川に住めり

水仙に嗽ぐ城内の曉を

Ⅱ、朱鞘社の會合

工務所に傘借りし鮎川の雨

赤き煙突見て鮎川に行き暮れぬ

牡丹園前の橋汐風の馬車

紙所の海明るさを牡丹見に

Ⅲ、根岸の集りにて

裁縫科に百舌鳥鳴いて綿入るゝ皆

芋所なる今日の獵界霜踏みて

寒の内雨景を芝山刈り刈らず

石屑を俵にす寒ンの草山に

枯野茶屋洲涯の普請眺めらる

峰裏上りす牛見ゆ綿の菊枯れて

Ⅳ、三ノ輪の集り

瓜の汁垂るゝ口この民あはれなり

腹這ふて一ツの願ひ瓜實のれ

足よろめきて暑き黄土に民逝けり

農園の露張るに夜長川音す

Ⅴ、朝鮮へゆきし日

鷄頭に雀群れて先き一里なり

葉鷄頭に犬走り海風强よき宿

雁來紅無花果畑の溝を見に

Ⅵ、門司をすぐる日

瓜店に目覺む煤煙の太る時

夏夜の廊灯舟の水先彩りて

Ⅶ、大阪へ立ちよりて

後雁は落ちず行く遊行松の立つ

舟上る女に鳴く雁やけふの供御

御野立に咏み禁にし花野鶏かな

四、日本俳句の私の片影

大阪篇

大正三年六月まで

日傘とられじと葭切橋の飛かな

日傘裏にかげる水見て道草を

海へ道岐るゝ日傘桐の木に

公園裡の日傘人皆莓見て

紫陽花や川臭き月の貸舟屋

登山行第二日紫陽花の雨宿り

工、最初の寓居

淡雪に安樂椅子の塵拂ふ

花藻見居る弓勞れ蘆間月となり

樟に湧く螢や塩を俵にす

渦見來し兒に藪螢淋しうて

街道書店前コスモスに捕虫器を

授業始鈴コスモスは旭に露含む

瓦投げて遊ぶ兒や波止の旭涼し

大鐵橋も一風致蟬の麻平ら

時鳥川尻の遊里二本杉

漆山下りし秋風の大畷

篠に閃めく海鳥や秋の風凪ぎし

温泉塲外の岩齒朶に秋風の疾き

紙塲路次の秋風明り海よりす

氾濫後の秋風人に豚鳴いて

紀念砲に腰すや柚の木百舌鳥鳴いて

Ⅲ、寺の夜々

蚊帳たゝむ朝暑し婉豆の花

雨蛙敷石に郵便投げてあり

雨蛙湯上りを反古散る室へ

茄子畑孕れる女の此頃は

短夜の星々倶樂部出る吾れに

牧場初日浴ぶる婢胸に鷄抱いて

Ⅳ、第三の寓居

春山にて礫すトタン屋根へまで

春山の夜町看板描き居り

蠢の家の梅の木に池濁るなり

夜烏騒がしき桃一木梨一帶に

風鈴や灘光る角力宿となり

蝙蝠に海白し瓜抱き行けば

高土手より來る蝙蝠や風鈴に

柳絶間の蝙蝠に橋新たなり

葉戰がす扇を頒つ癈兵に

上州氣質見ゆ夕月の店銀杏

靴を乾す日曜や野分樣降らす

蜻蛉や笹刈りて西日に萎む腕

山岳會一行に銀杏雨降りて

体操時間皆驅けて水鳥の晝

外套被(かぶ)り行く水鳥の朝の雨

アイノ地誌水鳥村と謂ふがあり

暖爐煙突接なぐ砂川の輝やく日

暖爐運び來し轍椿に深うしぬ

V、紙衣句會の日

餅花や酔醒めを都鳥下る

闘鶏の柳垂る餅花の家

濱日和雀咬む猫鶏頭に

野分後今宵宴ある額運ぶ

秋日和疾く驅けて眼鏡毀したり

Ⅵ、公園の小亭にて

覺めて十二時日曜の蝶を天井に
蝶の來る安樂椅子に閑な婢よ
蝶見るとなく瞳を合はす恥しさ

夏夜風搖らなる吾が行末は
嘔吐きし苦しさ螢の河岸を擁せられ

Ⅶ、廊の或る家にて

冴に返る朝食堂に拾ふもの

帶封裂き捨つ冴返る朝風に

蜜柑賣冴え返る姿普請木に

川三叉の茄子畑藏曳きしまく

水鷄月夜竿乾し物を柿の木に

合宿黨の灯赤う水鷄森の月

Ⅷ西の宮の或る日

青梅の旭高し未だ覺めずやと
太陽の眞下なる麥の家々よ
青梅にのぼる子の帶解けて落つ
初夏の光り肌黑ろき乳房ふくませて

麥に働らき暮れし人々夕闇へ

X 伊賀上野へゆきて

一村長男を擧ぐ

春日織り垂るゝ大地に生れて來たり

白涙長男を擧ぐ

草のけはひにも蚊帳に身をかくせ

五春娶る

二人の家の眠りを若葉の重なりつ

XI人を祝して

水鳴子の母逝ける

虫の闇のひろがりあまりに先んぜり

寒骨の愛孃逝けり

初夏の光り玩具のいろ〳〵凄し

XII 人を悼みて

霞を出づる人々の足の大なる

欠伸びせし手の長さ凧の夕殘り

けむり縱に横に行けり梨畑の晝

餓じうて日輪まじと見る櫻

出抱きし子の肥りて桃の日當りに

雨上りし桃に出て漁夫の旭に笑ふ

鳶の下煙黑ろく雪解道惡ろし

猫の戀病髪を亂し居る安さ

梨花夜景吹殼の火が二階より

大魚かつきて續けり浦の春の月

マッチ消ゆ夕風空の燕かな

柳に佇み夜の商況を見るとなく

銀座柳に野球の唄の聲すなり

初戀は柳に白ろいギードルよ

初夏の海昇る朝日に相抱く

初夏の雑草に海を越にし身よ

麥の家より走るよ髪の解け靡く

鷗翼をひろげて裸戀しげな

戰は熱風に裸連れ向ふ

金魚玉下に靜かにして遊べ

ランプの下に螢握りし掌をひろぐ

堤果て吾れより螢吹き上げし

捕はるゝ今蚊の闇の彼の裸かな

吹殼を踏みにじる菊の朝の風

覺めて眠むし山茶花に煤烟燦めける

山茶花に大河に怒氣を覺ますべく

XII 五日會の集り

春日浴びてインキを玩具にしたるらし

醜くき隣りとつくきて夏の吾家かな

白百合に手紙握りて戦慄きぬ

梅雨上りし青空へ洗濯物靡け

驗温器毀ちし梅雨の氣のいらち

旭に肌ひろげ見し肥り菊の中

時雨るゝ川面の明るさに朝湯溢るゝよ

XIII 第四の寓居

「海岸通り」の朝燕太陽赤し

旭に交り來る燕に化粧肌見せて

油煙のぼれり春の夜の或る一ト室

嘔吐きてうめきて獨り春夜のあはれ見ゆ

春夜人驚ろきに瞳見張りしが

日傘まわりより脱まれて濱に立つ

玄關一杯の夕日夏帽と蛤と

博士の卓白百合に骸骨立てり

暗らい海蚊帳の中に泣いてゐる

雨蛙たすき外して待ちながら

古るき診斷書裂く獨り笑み柿の晴

蜻蛉眩ゆく職工草に身を投げて

海冷たかりしふるゐ可笑しさ朝顏に

濱の月見草に足跡の別れて行けり

吹殼に手伸ばす初冬あはれ

四人一列に柳枯るゝ夕日血の如し

冬日影大きな男海邊に立てり

巨鐘淋しく春近き日の温みしぬ

氷上に燃ゆ猛ける火美し夜の宿

皿の破れし響廊下を走る冬

闇を衝く初日に物のうめきかな

初日あたる笑顔小鳥を掌の上に

XV、その日毎より

容奥附

大正三年七月廿八日印刷
大正三年八月十三日發行

〔定價　金參拾五錢〕

作者　内田榮次郎

發行者　大阪市南區難波元町二丁目浪花銀行内　内田榮次郎

印刷者　大阪市北區上福島二丁目六七七　藤木貫造

印刷所　大阪市北區上福島二丁目六七七　株式會社大阪國文社

發行所　大阪市東區平野町三丁目二九　振替大阪二〇七八七番　柳屋書店

Vol.

終